

設置された昭和38年に再び特産課の所管となり、昭和43年蚕糸園芸局の誕生にあわせて特産課は畑作振興課と改名され現在に至っている。

また、いも類係が特産課の一つの係になったのは昭和17年で、当時の工芸作物係から分離し現在の畑作振興課いも類班に受け継がれている。

現在も続いているしょ友会は（設立時藩友会）昭和22年、係の親睦会として発足したもので、現在はOBも含む会として現役諸君の世話で時に応じ会合が持たれている。このようなひとつの係の会が永続していることは他

に類例が余りなく嬉しい限りである。

初代の特産課長は、後に農林大臣をも務められた故坂田英一先生であり、いもの坂田と称されたことは有名である。

農産課時代に人を案内し、田園調布の坂田先生宅を訪ねたことがあった。裸姿で庭に散水をされていたが座敷に招じられ、夕食を御馳走になったことを覚えている。

坂田先生の晩年好んで揮毫されたという「春風接人」なる詞を教えられ、多くの得難い知己を得たことに感謝し、生産から流通消費迄変幻多いいも類行政の一端を経験できたことの喜びを今本当に感じています。

器内増殖に思う

土に植えず、実験室内で幼植物を育ててこれにジャガイモ塊茎（いも）をつけてふやす、器内増殖法が世界各地でさかんに行われ、日本でもところによってはすでに実用化し、あるところではとりくむか否か、とりくむとしたらどのようなシステムでやるか模索中である。

器内増殖の最大の利点はウイルス無毒であることはもちろん、その他の土壤伝染性病障害に全く侵されない状態で種いもを増殖できることであり、また季節を問わずくり返せるので、貴重な材料の急速増殖に便であることである。今後この技術が有効に活用され、ジャガイモ生産が安定するのはよろこぶべきであろう。

しかし、器内増殖にも短所はある。資金・労力がかかること、生産されるいもが小さいので、畑あるいは温室・網室などに植付けたとき、その管理に細心の注意を払わなければならない。

種ジャガイモ生産適地をもたないが、どうしても種作りを手がけたい事業所であ

れば、否応なく多量はいもの生産が可能な施設をつくらなければならないが、もしこのような企業が採種適地に広大な用地をもっていたならば、器内多量増殖をするのがよいのか、あるいは適地の畑で増殖をはかるのがよいかは議論のわかれるところであろう。

ジャガイモは安定作物として、安価な庶民の食物として世界の冷涼地域に定着しているが、それにしても以前は現在のように多額の資金・多数の労力を投じなければつけないものではなかった。対応の難しい病障害等の多発により、高度の技術を駆使しなければいもがつかれなくなったのが現況であろうが、これらの病障害等は以前からどこかに潜んでいたものが、最近になって人目につくようになったのか、あるいはあまりにも人間がいもをいじくりまわしたために新たに発現したものなのであろうか。

科学技術の進歩は喜ばしいことではあるものの、庶民のジャガイモがあまりにもひ弱な高級野菜なみになってしまうことには複雑な感がないではない。（秋元 喜弘）